

II. 病害虫ミニ情報

水稻種子伝染性病害虫の防除対策について

水稻種子は毎年更新することが基本です。通常の採種ほ産種子は消毒種子となっていますが、未消毒の種子を使用する場合には種子消毒を徹底してください。

水稻の種子伝染性病害虫には、ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病、イネシンガレセンチュウなどがあります。これらを防除するためには、種子の段階で適切な防除（消毒）を行うことが重要です。

1. 種子消毒の方法

【採種ほ産種子（消毒種子）の場合】

採種ほ産種子（消毒種子）には、モミガードC・DFとスミチオン乳剤が吹き付け処理されており、浸種作業を行うと種子消毒ができる。浸種の際は、種もみ1kgに対して水4リットルとし、3日間は水を換えないようにする（次ページの作業の流れとポイントの浸種以降を参照）。

【未消毒種子の場合】

- (1) **温湯処理**：60℃の温湯に10分間の浸漬処理で、いもち病、ばか苗病、イネシンガレセンチュウ等を防除することができる。ただし、処理水温・時間は正確に行い、処理後は水中で速やかに冷却する等の注意が必要である。
- (2) **生物農薬**：表の薬剤（薬剤名の後ろに（生）の記載があるもの）が農薬登録されている。使用方法により適用病害虫が異なる場合があるので注意する。
- (3) **化学農薬**：薬剤は表を参考にする。処理方法は、浸漬、塗沫、湿粉衣がある。薬剤によって利用できる処理方法が異なるので注意する。

病害虫 薬剤	ばか苗病	いもち病	ごま葉枯病	もみ枯細菌病	苗立枯細菌病	褐条病	苗立枯病(リゾプス菌)	苗立枯病(リゾグム菌)	苗立枯病(フザリウム菌)	イネシンガレセンチュウ
スポルタック乳剤	○	○	○							
トリフミン水和剤	○	○	○							
ヘルシード水和剤	○	○	○							
スターナ水和剤				○	○	○				
スポルタックスターナSE	○	○	○	○	○	○				
テクリードCフロアブル	○	○	○	○	○	○	○	○		
モミガードC・DF	○	○	○	○	○	○				
スミチオン乳剤										○
エコホープ（生）	○	○	○	○	○		○			
エコホープDJ（生）	○	○		○	○	○	○			
タフブロック（生）	○	○		○	○	○	○		○	
モミゲンキ水和剤（生）				○	○					
モミホープ水和剤（生）				○	○					

表 種子伝染性病害虫に適用のある主な種子消毒剤（平成21年1月1日現在）

- 注) 1 使用にあたっては、農薬のラベル等をよく読み、使用基準を確認する。
 2 種子消毒に用いた薬剤も農薬の総使用回数にカウントされる。
 3 スミチオン乳剤については、製造会社により稲に登録が無い場合があるので、注意する。
 4 薬剤名の後の（生）は生物農薬を示す。

2. 播種までの作業の流れとポイント

種子の選別（自家種子の場合）（塩水選）

- ①自家もみを種子として用いる場合には、塩水選を行って充実した良質のもみを選別する。塩水は、うるちでは比重 1.13（水 10 リットルに対し食塩約 2.7 kg または硫安約 3 kg）、もちでは比重 1.08（水 10 リットルに対し食塩約 1.7 kg または硫安約 1.8 kg）に調整する。
- ②塩水選後は沈んだ種もみをよく水洗いし、水を切って塩分をできるだけ取り去る。

※やむを得ず自家種子を使う場合には、種子伝染性の病害虫が発生していない水田から収穫した健全なもみを使用し、種子消毒を実施する。

種子消毒（薬剤処理）

浸漬処理

- ①種もみと薬液の容量比は 1:1 以上とする（めやすは種もみ 1kg に薬液 2 リットル以上）。
- ②薬液の中で種もみを入れた網袋をよくゆすり、もみ表面に薬剤を均一に付着させる。長時間浸漬（5 時間以上）の場合は、浸漬中に薬液を 1~2 回攪拌する。薬剤によっては薬液から引き上げた種もみは水洗いせず日陰に広げて 24 時間程度放置し、種もみに薬液を乾燥・固着させるものもある。
- ③水温は 10~15℃とする。低すぎると、薬剤の効果が低下する場合がある。

塗沫処理

適当な容器内で種もみを攪拌しながら薬液を滴下するなどして、種籾を均一に付着させる。

湿粉衣

種もみが湿った状態で薬剤を均一にまぶす。

浸種

- ①流水中では薬剤が洗い流されてしまうので、バケツやコンテナ等に溜めた水に浸漬する。河川、ため池などで行わない。
- ②種もみと水の容量比は 1:2 とする（めやすは種もみ 1kg に対して水 4 リットル）。
- ③水を交換する場合は、3 日以上経過してから上澄みを静かに流し、新しい水を追加する。
- ④水温は 10~15℃、水温積算温度（水温×日数）で 100~120℃（水温 10℃で 10~12 日間）とする。めやすは「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」は 120℃、「ゆめひたち」は 110℃、他の品種は 100℃である。ここで十分に浸種しないと、出芽が揃わない原因となるので注意する。

催芽

- ①催芽の程度は、出芽を揃えるために必ずハト胸状態とする。
- ②催芽や出芽時の高温条件は、病害の発生を助長するので、加温条件は 28~30℃程度とし、必要以上に高めないようにする。ハウスや日の当たる場所で管理すると、昼間は予想以上に水温が高くなる場合があるので注意する。

播種

播種量が多すぎると病害の発生を助長するので適正な播種量を守る。用土や資材は病原菌のないものを用いる。必要に応じてこれらも消毒する。

育苗

育苗中に発生する病害の対策として、適正な温度・水管理で育苗し、健苗育苗を心がける（これらについては次回以降に掲載予定）。

留意事項：

種子消毒の残液、薬液および容器・器具などの洗浄に使用した水は、かんがい水路、排水路、河川、湖沼などの水系には流さないでください。